



Title	森谷繁教授について
Author(s)	進藤, 省次郎; SHINNDO, Syojiro
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 99, 181-183
Issue Date	2006-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/14799
Type	departmental bulletin paper
File Information	2006-99-181.pdf



森谷 紜教授について

進 藤 省次郎

A Portrayal of Professor Kiyosi Moriya

Syojiro SHINNDO

森谷紜教授（以下先生とする）は、2006年3月31日をもって北海道大学を定年退職された。先生は、1977年4月に教育学部助教授として着任されて29年、それ以前の1965年5月の本学医学部放射線医学講座の助手として着任されて以降から数えると、41年もの長きにわたって、本学および医学部、教育学部・教育学研究科の教育と研究の発展のために全身全霊を注いで来られた。先生の退職に当たり、簡単にその略歴と教育、研究の歩みを紹介させていただく。筆者は、先生とは研究分野は異なるが、同じ健康スポーツ科学講座の一員として、先生の本学におけるご活躍の後半の22年、教養部（全学教育）、教育学部・教育学研究科でともに過ごさせていただいた。先生のご経歴とご研究の全体像を理解しご紹介するには足りないが、その点をご海洋願いたい。

先生は、1943年2月18日、中国大連市でお生まれになった。引き上げ後、岩手県宮古で少女時代を過され、1961年3月岩手県立宮古高等学校を卒業、4月に北海道大学理類に入学し、1965年3月医学部薬学科を卒業された。1965年4月、薬剤師の資格をとられ、同年5月医学部放射線医学講座の助手として着任され、翌1966年11月、医学部生理学第一講座に移られ研究に邁進された。その間、研究の成果をまとめられ、1972年6月、論文「寒さに対する脂肪組織脂酸構成の適応性変化」で医学博士の学位を取得される。

1977年4月、教育学部に移られ助教授として着任され、1992年5月、教育学部教授に昇進された。その間、1986年から1987年にかけて日本学術振興会在外研究員としてカナダで研究されている。2000年4月、大学院教育学研究科健康スポーツ科学講座教授となられ、2006年3月ご退職と同時に、本学の名誉教授となられた。

先生の研究は、一言でいうと“自然・生活環境と生体の変化・適応の関係”についての自然科学的、実証的研究、すなわち、自然環境（気象）や生活環境が、そこで生きて生活する生体に如何なる影響を与えるのかを実証的に解明するところにある。それは、大きく分けて、医学部時代の動物を対象とした生理学的、生気象学的な基礎研究と、教育学部時代の人間を対象とした生理学的、生気象学的な基礎的・応用的研究に分けられる。

医学部時代には、主にラットを研究対象として、気象、特に寒冷（寒さ）という諸条件が生体の体温、血液、組成にいかなる反応・変化をもたらすのかを究明された。また、教育学部・教育学研究科では、生活者としての人間、特に、高齢者、女性、大学生に目を向けられ、そのQ.O.L（生活の質）の向上という大きな目標に向けて、芳香と生体反応、リラクセーションと

心身の機能変化、生活や運動と健康・生きがい・基礎体力の関係など、広く自然・生活環境と生体の関係についての実証的な研究を精力的に進められた。

先生は、北海道大学の生んだ希有な気鋭の女性研究者であると同時に、教育活動や学内外の管理運営や社会的活動においても、目立たないけれども非常に大きな貢献をされている。

教育活動においては、教育学部に移られて以降だけを見ても、1977年から本年3月までの29年間、全学教育（含教養教育）における健康科学（保健体育理論）や教育学部の教育生理学、栄養教育論、教育学専門演習、健康体育学実験、卒業論文指導などを担当されつづけ教育された。また、教育学研究科では、健康教育科学基礎論、健康教育科学特論、健康スポーツ科学研究法、文献講読などを担当され、また、修士論文・博士論文指導を通して数多くの修士及び博士の学位取得者を輩出された。

これら以外にも、全学教育の総合講義（女性学）、北国の健康と運動・スポーツや食の健康学（科学技術の世界）、健康科学演習や、教育学部の教育学基礎演習、教育学特別講義、HUSTEPなど、中広い数多くの授業を担当され教育された。また、先生は他大学からも所望され、健康科学（日赤北海道看護大学）や北国の健康科学（北海道文教大学）などの講義も担当されている。

先生のおだやかでやさしいお人柄と、実証性に富んだ研究にもとづいた入念に準備された分かりやすい授業は、学生たちの心を大いに動かし、教育学部や先生のゼミを目指す学生が少しずつ増えていったのもうなづける。教育学部の数あるゼミの中でも先生のゼミは、学生、院生で溢れていたゼミであった。

学内外での先生のご活動に目を向けてみよう。教養部時代は、健康科目の学科委員や教養部広報紙「環珞」^{ようらく}編集委員などを、教育学部では、研究計画委員や教務委員を遂行され、全学的には、学生部委員、学生相談室運営委員、セクシャルハラスメント相談委員、男女共同参画委員、発達脳科学研究教育センター教務委員を遂行され、体育指導センター長、総長補佐を歴任された。

学外においては、札幌消防局消防科学研究所との共同研究や、植物情報物質研究センター理事、札幌市食生活指針検討委員会委員長、北海道女性研究者の会世話人などを歴任され、学会活動では、日本生理学会、日本体育学会、日本体力医学会、日本運動生理学会、日本生気象学会、日本健康教育学会、日本栄養改善学会、日本心身医学会など数多くの学会に所属し中広いご研究を旺盛に進められている。また、日本生理学会、日本気象学会、日本運動生理学会、日本体力医学会の各学会では多くの会員の信望をあつめられ、評議員としてその重責を現在なお全うされている。

最後に、先生のお人となりに触れないわけにはいかない。先にもふれたが、先生とは教養部時代の教官会議や学部・研究科教授会でご一緒させていただいた。発言の数こそ多くはなかったが、いつも議論の内容や方向の全体を静かに聞いておられて、教員同志が声高になり議論が紛糾したような時に穏やかにしかも適格なご意見を述べられていた。

私は、先生の声高な語りや怒った顔を見たことがない。それは、長きにわたる深い洞察と研究に裏打ちされたお人柄であり、授業における講義や会議での発言、そして日常会話においても、いつもゆったりと物事を俯瞰しながら事の本質を見きわめようとされていたからだと思う。そして、研究の心の目は高齢者や女性という「社会的弱者」に向けられ、成長しつつある学生や院生に対しては、何かを教えるというのではなく、同じ目線に立って一緒に歩いていく

という研究と教育の姿勢を貫かれていたように思う。学生や院生は、先生のことをいつしか“おかあさん”とよんでいたのを思い出す。私はいつも、先生に、“ほんとうの教育者，研究者”の姿を見ていた。

法的には両性の平等が規定されていても、今日になってなお、というより、ようやく「男女共同参画社会」とかその担当大臣が出現するという社会的状況にあって、もちろんご伴侶やお子さまたちの支えやご協力があったることではあろうが、大学の内外において男性教員に伍して、いや、男性教員以上の厩大なお仕事を、目立たず静かに成し遂げて来られた先生は、わが研究科の15%の女性教員の母親的、姉的存在であり、先達としての目標像となっているのではないかと思われる。

現在、先生は天使大学看護栄養学研究科の教授として招かれ、北大の学生とはまた違った新しい学生たちに新しい気持ちで教育・研究に勤しんでおられます。一時期、体調を崩された時期がありましたが、持ち前の心と気力で快復されました。北海道大学での41年間のお仕事に心からの敬意と感謝の意をお送りするとともに、これからもご自愛の上、ますますお元気でご活躍されますことをお祈り致します。